

佳作

医師になりたい

青森県青森市立佃中学校

3年 谷地 遥香

「人の心に寄り添える医師になりたい。」

今から約4年前、新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちはそれまでとは全く違う生活を強いられました。家で過ごすことが多くなったある日、テレビのニュース番組で見た医療従事者の姿に大きな衝撃を受けました。防護服を身に付け、未知の感染症への恐怖や自分が感染するかもしれない不安を抱えながらも、「絶対に助ける」という覚悟と強い意志を感じたからです。命を救うことに全力を尽くしながら、病室に隔離されている患者さんの、「家族に会いたい」という気持ちを汲んで、オンライン面会の準備をする。患者さんに寄り添って、できることを模索し行動する姿は、私の心に深く刻み込まれました。その日から、私の夢は、「人の役に立つ仕事に就く」という漠然としたものから「医師になる」という明確なものに変わったのです。

今年の夏休み、高校3年生の兄と一緒に医学部のある大学のオープンキャンパスに参加しました。講義の様子や卒業後の進路など、さまざまな説明を聞きながら自分の未来を想像しているとワクワクしてきました。在校生が、「ここでは全員が積極的に意見を出し合いながら、誰一人さぼることなく実習に取り組んでいます。」

「他の医師や看護師、何より患者さんと接する上で、コミュニケーション能力は必要不可欠です。」

と話しました。私は自分の意見を積極的に伝えたり、ディスカッションしたりすることが苦手です。自分の弱点を指摘されているようで、今のままでは医師になることができないのではないかと、急に不安になりました。

オープンキャンパスから帰宅し、今の自分にできることは何か、改めて考えてみました。一つ目は積極性を身につけることです。例えば、授業中のグループワークなど、少人数で話す場面で自分の意見を伝えることから始めてみよう決めました。二つ目は、今まで以上に勉強に励んで志望校に合格することです。単に知識を得るだけでなく、これまで挑戦してこなかったような課題に取り組んだりして自分の力を伸ばしていきたいと思います。三つ目は、日頃から相手の気持ちを考えて行動することです。先日、最後の中体連が終わり、私は、目標だった県大会出場を叶えられませんでした。あんなにも練習したのに、目標に手が届かなかった悔しさに涙が込み上げてきた時、チームメイトが、

「遥香は誰よりも練習していた。ひたむきに努力する姿に私も元気と勇気をもらっていたよ。」

と言ってくれました。私の努力を認め、悔しさに共感してくれる存在にどれほど救われたのでしょうか。あの時、彼女が声をかけてくれなかったら、私はいつまでも落ち込んでいたかもしれせん。私も彼女のように、相手の気持ちに寄り添い、支えたり励ましたりできるようになりたいと思っています。

私が好きな漫画に、家族を亡くした家族がベテランの看護師に向かって、「看護師って涙ひとつ見せないんだね。」

と、なじる場面がありました。看護師に動揺や悲しみがないはずはありません。それなのに、どうしてそんなひどいことを言えるのかと思ったものです。でも、それは、家族が亡くなるという大きなショックや喪失感、やりどころのない深い悲しみを誰かにぶつけたかったからではないかと思うようになりました。私は身近な人を失うという経験がまだありませんが、患者さんだけでなく、その家族の思いをしっかり受け止め、向き合っていくことも必要なのだと思います。

これから、さまざまな経験を通して、「人の命と向き合う」というのはどういうことかをしっかりと考え、「人の心」と向き合い寄り添うことで、あの日テレビで見た医者のように、一人でも多くの人々の命を救う医者を目指していきます。